高校生患者の家族 連携

入院中の学習 支援もっと

LINEでノート送信／学生がボランティア教師

入院中の児童・生徒への教育のため、病院内に設置される「院内学級」。ただ、義務教育ではない高校生を対象にした院内学級の整備は、学習内容の違いや個々人の学力差が大きいことなどから進んでいない。入院治療で10代後半の大切な時期の学習に空白期間が生じることや、同級生と一緒に進級できず勉強への意欲を失うことも懸念される中、治療との同時並行で必死に学ぼうとする生徒もいる。そして、こうした子供たちを支援しようと、活動を始めた家族もいる。

奈良県内に住む高校2年の岡野梨奈さん(16)＝仮名＝は、急性リンパ性白血病の治療のため、高1の秋から約半年間、大阪市内の病院に入院した。懸命に治療に励んできたが、「友達と一緒に進級できないかもしれない」という不安が心に重くのしかかったという。

出席できない授業に遅れないように、岡野さんは同級生に頼んで携帯電話の無料通信アプリ「LINE（ライン）」を使って日々のノートを写真で送ってもらった。多い日で写真は10枚以上。体調のいい日にベッドの上や病院内の学習室で写真をノートに写したが、中学に比べ授業内容は格段に難しく、苦手な化学や物理はほとんど理解できなかった。「教えてくれる人がいれば…」と焦りは募った。

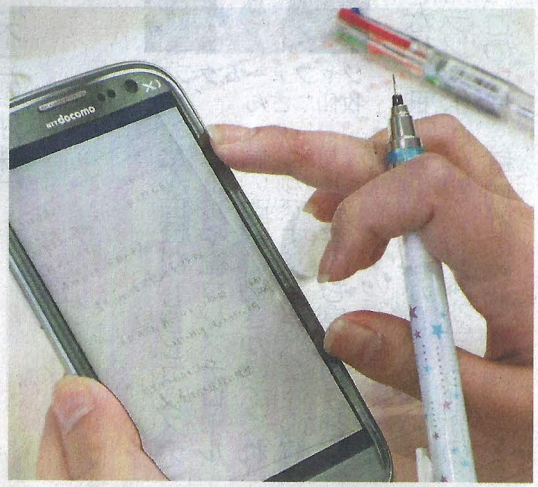
月1回の一時退院の日はできる限り学校に通い出席日数を確保。学校が出す課題にも懸命に取り組み、進級できると言われたときは安堵で涙があふれた。

「治療が優先。勉強は治ってからでいいじゃない」という人もいる。でも岡野さんは「夢は保育士。病気でも学びたい気持ちは変わらない」と訴える。

こうした状況の改善に向け、実際に動き出した家族もいる。昨年1月に小児がんの一種、ユーイング肉腫で亡くなった大阪市旭区の久保田鈴之介さん＝当時18)＝の両親は同12月、患者の家族と「難病学生患者を支援する会」を立ち上げた。入院中に勉強の遅れに不安を感じた経験から、学習環境の改善を行政に訴えた久保田さんに共感した5家族が情報交換。1人の患者に勉強を教える学生ボランティアをつなぐことにも成功した。

同会のメンバーで、高校1年の長男が小、中学時代に入院を経験した大阪府東大阪市の立入慎太朗さん(42)は「ボランティアを派遣する仕組みがひとつの有効な手段。医療の道を目指す学生など（病院で）教えたいという意欲を持つ人もいると思う」と話す。

入院する高校生らの環境改善に取り組む大阪市立総合医療センターの原純一副院長は「生徒の意欲維持のため学習環境を整えることは効果的。入院中の子供をどう育てていくか、地域を巻き込んで考えるべき課題だ」と指摘している。



入院中、授業のノートを撮影して携帯電話で送ってもらい、勉強についていこうと懸命に努力する高校生もいる

学習環境改善への理解を呼びかけた久保田鈴之介さんの母、鈴美さんと父、一男さん ＝29日、大阪市中央区

鈴之介さんの両親「運動広げて」

長期療養中の高校生の教育や就労を考えるシンポジウムが29日、大阪市内で開かれ、昨年1月にユーイング肉腫で亡くなった久保田鈴之介さんの要望をきっかけに創設された入院中の高校生に非常勤講師を派遣する事業をこれまでに25人が活用したことなどが紹介された。講演した久保田さんの両親は「多くの課題を解決するため（学習環境改善の）運動を広げてほしい」と訴えた。

シンポは、小児がんの患者が治療を受けながら家族と過ごせる施設を開設したNPO法人「チャイルド・ケモ・ハウス」（神戸市）が主催し、約50人が参加した。

久保田さんの母、鈴美さん(50)は「息子は『元気になったら（授業は）取り戻せる』と言われたのが一番つらかったと言っていた。余命が頭の中にあったようで『今を逃すといつやるの』という思いだった」と語った。

非常勤講師の派遣事業については、大阪府教委の担当者が「『闘病中の心の支えになった』『学校に戻るときの不安が減った』などの声が寄せられた」と紹介。中学時代に悪性リンパ腫を発症し闘病生活を送った同法人元理事長、楠木重範さん(39)は「『今を生きる』ということを病気の子供たちから教えてもらっている」とし、環境改善への理解を呼びかけた。